
図書館オナニーが
レズな司書にバレて
快楽堕ちさせられちゃう

図書館の奥、いくつかの閲覧席が固まった区画はひっそりと静まり返っている。綾音（あやね）はそのうちの一つの席に座り、周囲を警戒しながら腰をくねくねと動かしていた。

他の利用者の視線はほとんど届かない奥まった席。衣擦れの音と、何かを誤魔化すような咳払いが響く。

その様子を、司書の理沙（りさ）は書棚の陰からこっそりと見ていた。

（あの人、今日も……）

綾音は見られていることに気づいていない。手がスカートの中に入り、もぞもぞと動く。太ももを擦り合わせ、腰が一瞬ピクッと反応する。

（イ、イクっ……）

椅子がゴトンと音を立て、体を小さく硬直させて小刻みに震える。静かな絶頂が綾音の中にじんわりと広がっていく。

（また、やっちゃった…）

最初は仕事のストレスを発散するための、ほんの出

来心だった。それが徐々にクセになってしまい、気づけば何度も足を運んでしまっている。

　図書館の奥で、誰にも気づかれずに絶頂に震える快感。いや、誰にも気づかれていないはずだった。

　理沙が本の整理をするふりをして静かに近づいていく。その気配を感じ、綾音は慌てて姿勢を正し、スカートの裾を整える。

　理沙は綾音の後ろで立ち止まり、落ち着いていながらも、妙に色気を含んだ声を理沙の耳に落とす。

「今、何してたんですか？」

　軽い絶頂の後で熱を持っている綾音の体がさらに熱を帯びる。

「えっ、いえ、なにも……」

「なにも？　普通は、本を読んでいたと答えるものですよ？」

「いえ、その、本は読んでました…」

「それ、官能小説ですよね？」

「そうですけど……」

綾音は咄嗟に本を隠すように体に引き寄せる。

「なんで隠すんですか？　官能小説には素晴らしい文学的魅力があります。私も、よく読むんですよ？」

まだ敏感な綾音の体に理沙の手が触れ、肩から脇腹へと滑り降りる。

「んっ……」

思わず漏れてしまった声を、椅子を引く音で誤魔化す。

「綾音さん、ですよね？」

「えっ、なんで……」

「利用者名簿を調べました」

耳にかかる吐息といやらしい手つきに、綾音の体は抑えきれずに動いてしまう。

理沙は綾音の太ももを撫でながら続ける。

「奥の席でよく、オナニーしてる人は誰なのかな、って思って……」

その言葉に、綾音の体から一気に血の気が引く。

（うそ……バレてた……）

頭が真っ白になり、何も答えられない。焦りがスカートの裾を握る手に表れる。

理沙は意地悪そうにクスっと笑い、隣の席に座ってもう一度尋ねる。

「オナニー、してましたよね？」

とにかく何か言い訳をしないといけない。そんな思いで口を開く。

「ち、違います、やってません。ここ、涼しいから、いつも……」

なんの言い訳にもなっていない。自分でも何を言っているのか分からない。

理沙が椅子を寄せ、綾音のスカートを捲り上げると、柔らかそうな太ももが露わになった。

「ちょっと……」

「ふふっ、ショーツが濡れてますよ」

理沙はそう言って、ショーツの上からクリトリスを撫でる。

「んっ……」

「すでに感度も上がってるじゃないですか。ちゃんと正直に言ってください」

　クリトリスを撫でる理沙の指が速くなる。

「んあっ……」

　綾音は唇を固く結んで声を抑えようとする。腰が無意識に前後に揺れ、体に力が入る。

「声出したら、誰か来ちゃうかもしれませんよ？」

　指がショーツの中に入っていき、ゆっくりと、直接クリトリスを撫で回し始める。

「あぁっ……！」

　綾音の声が僅かに大きくなる。体がピクリと跳ね、捲られたスカートを戻そうと必死に抗う。

「抵抗するんですか？　それなら……」

　愛液でぬるぬるになった理沙の指がクリトリスの上で何度も往復する。

「んんっ！」

「どうなんですか？　早く言わないと……」

　指が入り口に押し当てられ、ぬちゅぬちゅと意地悪

に刺激する。
「ほら、入りますよ？　いいんですか？」
「待っ、て……ごめんなさい……や、やってました……」
　観念したように白状するが、理沙はそれでは許さない。
「何を？　図書館でこっそり、何をやってたんですか？　ちゃんと言ってください」
　綾音はスカートの裾をぎゅっと握ったまま、躊躇いがちに答える。
「……オ、オナニー……」
　静かな図書館の中でも聞き取るのが難しいほどの消え入りそうな声。その声の小ささを咎めるように、理沙の指が、ぬちゅりと水音を立てて綾音の中に入っていく。
「んあっ……なんで……ちゃんと、言いました……」
「あんな小さな声じゃ、言ったうちに入りません。もっと、図書館中に響き渡るくらいに……」

理沙はそう言って、指をさらに奥まで沈めながら、からかうように微笑む。

「あんっ、そんなこと、できるわけ、ないです……」

「お手本を見せましょうか？　もし私が今、図書館中に聞こえるように、『この方、オナニーしてました』って叫んだら、どうなるでしょうね？」

（そんなことされたら……）

綾音は無意識に想像してしまう。声に誘われ、書棚の陰からさりげなくこちらの様子を伺う利用者たち。その人たちに向かって理沙が手招きをする。遠慮がちに集まってきた利用者たちに囲まれる中、理沙の指が、綾音の中を掻き回す。知らない人たちに見られながら、中もクリも責められ、やがて絶頂してしまう。

想像しただけで、中がきゅうっと、理沙の指を締めつける。

「あら、締まってきてますよ？　なるほど、そういう趣味なんですね」

※体験版はここまでとなります。

続きは本編でお楽しみいただけると幸いです。